



おもすの森

発行
大本山 本門寺根源
山務庁
富士宮市北山4965
電話 0544-58-1004

日蓮大聖人

御聖訓

『薬王品得意抄』 (文永二年)

法華已前(ほつけいぜん)の華嚴經(けごんきよう)・阿含經(あごんきよう)・方等經(ほうとうきよう)・般若經(はんによきよう)・深密經(じんみつきよう)・阿彌陀經(あみだきよう)・涅槃經(ねはんきよう)・大日經(だいにちきよう)・金剛頂經(こんごうちようきよう)・蘇悉地經(そしつちきよう)・密嚴經(みつごんきよう)等の釈迦如来の所説の一切經、大日如来の所説の一切經、阿彌陀如来の所説の一切經、薬師(やくし)如来の所説の一切經、過去現在未来三世(さんぜ)の諸仏所説の一切經の中に法華經第一なり。

【現代語訳】

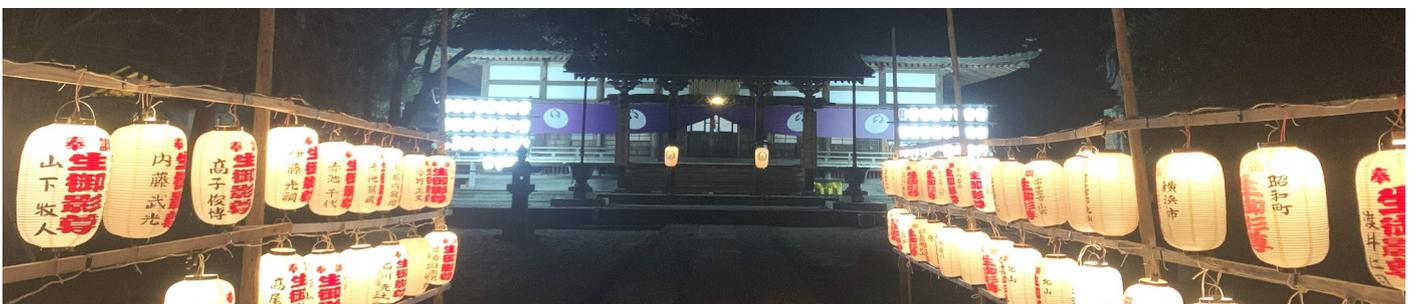
法華經以外の諸經、すなわち華嚴經・阿含經・方等經・般若經・深密經・阿彌陀經・涅槃經・大日經・金剛頂經・蘇悉地經・密嚴經等の釈迦如来のお説きになられた一切の經、ならびに大日如来・阿彌陀如来・薬師如来等のお説きになられた一切の經、さらに過去・現在・未来の三世にわたって説かれた一切の仏のすべての經典の中で、法華經が最も優れた第一の經であるということである。

※参考：『日蓮聖人全集』

令和7年 新年祝禱会及び除夜の鐘

日時 令和6年12月31日(火) 夜11時より 祈願受付・鐘付き整理券配布

- ❖ 新年祝禱会の後、祈願会を行いますので受け付けにてお申込みください。
- ❖ 除夜の鐘はこれまで通り一般参詣者も撞けます。同封の別紙をご参照ください。



御速夜法要(十一月十二日)

旭貫首猊下御名代として、鈴木執事長に御会式御速夜法要の導師をお務め頂き、厳肅なる法要が執り行われました。

また、生御影尊にお綿を添える御裏頭奉納之儀を行い、今年はその施主として石川正博様(本國寺筆頭総代)よりご御奉納頂きました。



御裏頭奉納 石川正博様



法要後、当山布教部・浦野弘正上人(写真左)による「御祖師様を偲ぶ 龍口法難」と題して

高座説教が行われ、引き続き重須孝行太鼓保存会による大聖人御報恩感謝の太鼓披露がございました。

御会式(十一月十三日)

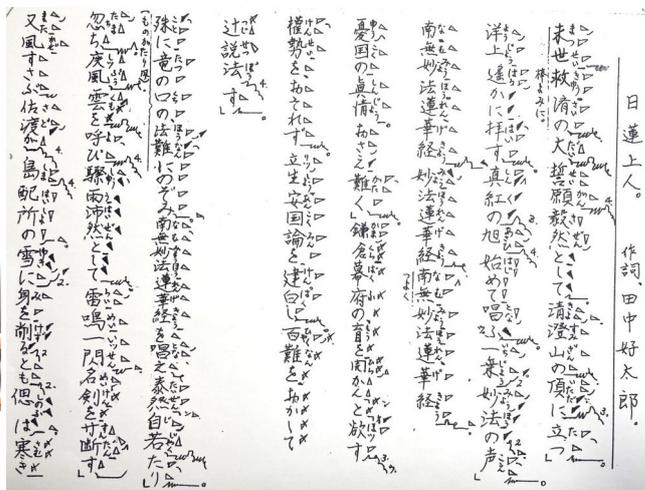
高祖日蓮大聖人第七百四十三遠忌御会式の大導師を旭貫首猊下にお務め頂きました。

本山實成寺田中日芳猊下・小泉久遠寺安藝日旺猊下並びに、末寺法縁寺院・当山役員・檀信徒をはじめ毎年塔中から養仙坊・西之坊の檀信徒の方々が、数多くご参列を頂き、日蓮大聖人生御影尊に向けて御報恩感謝の御題目をお唱之致しました。また当日は、塔中養仙坊の檀信徒である朝日芳雄様より詩吟『日蓮聖人』をご披露頂き大聖人御在世当時を忍ぶことが出来ました。



参拝される檀信徒

詩吟『日蓮聖人』の原本



御挨拶をされる旭日重貫首猊下



詩吟詠唱の朝日芳雄様

- | | |
|----------|---------|
| 本山・寺院 | 檀信徒 |
| 本山 實成寺 | 太田川一郎 |
| 本山 久遠寺 | 久保田 審 |
| 塔中 養仙坊 | 石川 達三 |
| 塔中 東陽坊 | 渡邊 和正 |
| 塔中 西之坊 | 後藤 幸夫 |
| 塔中 養運坊 | 佐野 洪二 |
| 塔中 蓮行坊 | 齋藤益正夫妻 |
| 塔中 大乘坊 | 佐野 昌彦 |
| 東京 蓮華寺 | 井出 和夫 |
| 横浜 宗川寺 | 堀内 正 |
| 富士 本國寺 | 杉田 正博 |
| 北山 本妙寺 | 岩井 易 |
| 富士 福泉寺 | 石川 武 |
| 蒲原 妙隆寺 | 片山 彰子 |
| 御殿場 久成寺 | 井出 和子 |
| 山梨 本照寺 | 石川 キヨ工 |
| 山梨 正法寺 | 堀内はるみ |
| 海老名 常在寺 | |
| 厚木 本禅寺 | 敬称略・順不同 |
| 茅ヶ崎 蓮妙寺 | |
| 岡山 顕本寺 | |
| 天母山 法華教会 | |
| 小泉 妙円寺 | |
| 富士 代通寺 | |
| 福岡 代行寺 | |

御塔婆供養された方々の御芳名を読み上げし大聖人遥拝廟に建立致しました

法華經に学ぶ 第二十八回

布教伝道部 浦野 弘正

仏さまのお説法の手順

前回は、「説法瑞」の本文の箇所をご紹介して終わりましたので、その続きからです。

仏教では、仏さまが法華經を説かれる前には必ず『無量義經』という教えを説かれることになっていきます。過去にお出ましになった十方の数えきれない仏さま方は、必ず法華經をお説きになつてから御入滅になるのですが、その法華經を説く前に、『無量義經』の教えを説くことが作法になつていて、このことは「方便品第二」で、お釈迦様ご自身も「如三世諸仏説法之儀式 我今亦如是説無分別法」^{（よさんぜ しょうぶつ せつぼうし ぎしき がこんやくによぜ せつむ ふんべつぼう）}「三世の諸仏の説法の儀式の如く、我も今また是の如く無分別の法を説かん」つまり、「現在・過去・未来に渡る多くの仏さまがそうしてきたように、あるいは未来の仏さま方がそうするように、私もまたお説法の儀式に則つて、これから無分別の教え、つまり分け隔ての無い最上の教えである法華經を説こうと思つてゐる」と仰るのです（『開結』一一〇頁、『岩波（上）』一二八頁）。

無量義經の位置づけ

『無量義經』は、本文にもあるように、仏さまが四衆に囲まれ、「偉大なる指導者」と仰がれ、崇め敬われ、供養され、礼拝され讃

えられる中で説かれる教えです。また「無量義」という名前の通り、広大無辺な教えです。そして全てを救う大乘の教えであり、菩薩さま方を導く教えであり、数えきれない仏さま方が大事に護つてきた教えなのです。

「教菩薩法」と「仏所護念」「無量義」

いま、「教菩薩法」を「菩薩さま方を導く教え」、「仏所護念」を、「数えきれない仏さま方が大事に護つてきた教え」とそれぞれ簡単に意識しましたが、この二つの言葉は法華經を讃える言葉としてもこの後何度も登場します。また「無量義」という言葉も、「広大無辺な教え」とひと言で説明しましたが、これも大事な言葉ですので、少し詳しくお話しします。

教菩薩法

立正大学の渡邊寶陽先生はご自身の著書に、「教菩薩法」は、先の説明から一歩進んで「菩薩として修行する道標」^{（みらしるべ）}であり、「菩薩さまが修行の道を歩む中でさらに自覚し、体得していく教えである」ともいえる、と説明されています。（渡邊寶陽『法華三部經大講義（以下、『大講義』と略称）』247頁）。

つまり菩薩さまが導かれる教えであると同時に、菩薩さまが菩薩さまとして修行を続ける姿そのものが「教菩薩法」だということですから。以前お話しした『涅槃經』の、「法灯明自灯明」「教えを拠り所とし、自らを拠り所とせよ」の教えに通ずるものがあります。

仏所護念

次の「仏所護念」を見てみます。渡邊先生は『法華經大講座（以下『大講座』と略称）』の小林一郎先生の説明（一卷一六三頁・一六四頁）を引用されながら次のように説明されています。

（仏所護念とは）「どうぞ弘まりますようにと願うこと」であると同時に、「うっかり誤つて弘めたら大変だぞ」と、この教えが奥行き深い教えであることに、十分注意せねばならないことをお諭しになられてゐる（後略）。

仏さま方が大事に大事に護つてきた教えだからこそ、簡単には説かれなかつたのである、五千起去の人々が出てくるように、「誤解を招きかねない」教えであるともいええます。

無量義

「無量義」を「広大無辺な教え」と意識しましたが、単に「広大無辺ではない」といいません。先ほどの『大講義』では、

華嚴時の「華嚴經」から始まる教えを積み重ねて、やつと導き出されるような、難解な教えであるけれども、同時に私たちの「一心」つまり素直な心から素直に引き出されてくるのが「無量義」である、と、今までのお坊さんたちが解釈してきてた。

と説明されています（『大講義』247頁）。
次回は、これを私たちに当てはめて考えるところから始めます。（続く）

『本門要軌』を読む 第二十七回

布教伝道部執事 阿部 和正

開山上人曰く「当門流に於ては御書を心に染め、極理を師伝して若し問有らば台家を聞く可き事。」（『日興遺誠置文』宗学全書一三二頁）と、我が門流に於ては、天台教学よりも先んじて、宗祖の遺された御書を自らの信心に深く刻み込み、その信仰の極理を師より伝授せらるべき事を説かれます。先述の如く當山御歴代も「宗祖の色読体験の聖録にして妙行の際に必ず拝読すべき」（第四十七世日幹貫首猊下）「富士の伝統は御書を基盤として培われてきた」（第四十八世日諄貫首猊下）等と説かれております。先師方の金言を心に刻み拝読してまいりたいと存じます。

偕『本門要軌』では、六四頁以降を参照し適宜に拝読すべきとなっております。日蓮大聖人御聖訓二十一抄・日興上人御聖訓三抄と系年順に収録されております。※檀信徒用では日蓮大聖人御聖訓十四抄・日興上人御聖訓一抄と収録内容が若干異なっております。それでは順に従って拝読してまいります。

立正安国論（聖寿三十九歳 文応元年）
汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。

仏国其れ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微無く土に破壊無くんば、身は是れ安全にして心は是れ禅定ならん。此の詞、此の言、信ずべく崇むべし。

聖寿〓宗祖の執筆年齢三十九歳。系年は文応元年（一一六〇）。対告者は鎌倉幕府前執権の最明寺入道（北条時頼）に呈出した私的勅文。真蹟三十六紙・中山法華経寺蔵。又當書には、開山日興上人の写本「日興本」が玉沢妙法華寺、同上人の解説書『安国論問答』が富士大石寺に所蔵されております。本門寺に於ては、同上人孫弟子・讚岐公日源の中世写本「建武四年丁丑正月廿五日當山門弟日源四十二才而書写之」、貞和五年己丑卯月十三日於富士上方上野郷水口日源五十四歳而書写之」の二本が所蔵されております。殊に貞和本は教団初期の『立正安国論』訓読の一端を伝える貴重史料と本間俊文先生（立正大学）が近年、文献的位置づけを論証されておられます。當書は宗祖の主要御書「三大部」「五大部」に入る代表的御書であり、日蓮門下で発行される信行用の経本類には必ず収録されております。當書の構成は全十段からなり、『本門要軌』中の同文は、第九段中の謗法の対治と立正安国の実現を催促する核心の部分になります。略訳をしますと、汝（貴殿）が早く信仰の寸心（誤った邪な信仰）を改めて、速やかに実乗の一善

（実大乘教〓法華経）に帰（帰依）するならば、然れば則ち三界（欲界〓欲望が盛んな世界・色界〓欲望を離れた物質のみの世界・無色界〓欲望と物質を超えた精神のみ）の世界。衆生が輪廻する迷いの境界）は皆仏国（娑婆即寂光〓久遠本佛が常在する靈山浄土）なり。以上の箇所は「如来寿量品第十六」の「衆生既に信伏し質直にして意柔軟に一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず時に我及び衆僧俱に靈鷲山に出ず」（『本門要軌』三八―三九頁）の経文に符合します。続いて仏国（靈山浄土）は衰えることなく（我此土安穩）、十方（四方・四維・上下。あらゆる方角）は悉く宝土（種種宝莊嚴）なり。宝土何ぞ壊れんや（我浄土不毀）。国の衰微無く、国土の破壊が無ければ、身（我身）は安全にして、心は是れ禅定（安穩）でしょう。此の言葉信じ崇めなければなりません。以上の箇所は「如来寿量品第十六」の「衆生劫尽きて大火に焼かると見る時も我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり園林諸の堂閣種種の宝をもつて莊嚴し宝樹華果多くして衆生の遊樂する所なり」（『本門要軌』四一頁）の経文に符合しております。まさしく宗祖が説く立正安国の仏土〓則ち久遠本佛が説く本門寿量品の仏土であり、私達末法の衆生が安住すべき本門戒壇の絶对的なる救済世界なのであります。（続く）

清掃奉仕 御礼

十月二十五日に、第九回境内清掃奉仕を実施致しました。十一月の当山御会式を迎える為、塔中末寺檀信徒と合わせて四十二名の皆様汗を流されまし

また諸堂内では重須婦人会・塔中寺庭婦人の皆様方が、香花替えと清掃を実施し頂き心より御礼申し上げます。

- 奉仕丹誠者御芳名
本門寺 渡井 将文
本光寺 遠藤 洋子
鈴木 君子
鈴木 世記子
鈴木 紗也
佐野 昌彦
佐野 国代
石川 洋子
望月 将一郎
佐野 公康
渡井 英機
平沢 計子
小川 知洋
石川 元彦
石川 達三
渡辺 均
石川 茂樹
太田川 一郎
太田川 久



今回も多くの皆様の手伝い頂きました。本誌をもつて感謝申し上げます。

- 宮島 三男
志邨 和利
東陽坊 望月 正見
加藤 貴之
富永 政則
石川 深千欣
石川 剛浩
西之坊 藤田 欣大
藤田 文代
後藤 幸夫
石川 結美
藤田 将二
藤田 淳
荻 貴世孝
野村 純正
渡邊 和正
矢邊 毅
齋藤 繁美
渡辺 京子
佐野 高子
石川 キヨエ
遠藤 英彦

令和六年提灯奉納者 敬称略/五十音順

有縁本山

法縁寺院

渡辺 真弓

塔中・末寺

天母山法華教会

寺族・檀信徒

- 本山 久遠寺 萱守山妙円寺
本山 實成寺 富士山山行寺
本山大坊本行寺 旭光山行蓮寺
塔中 養仙坊 妙経山一乗寺
塔中 東陽坊 船守山蓮慶寺
塔中 西之坊 慧命山蓮華寺
塔中 養運坊 上原山船守寺
塔中 蓮行坊 久遠山妙蓮寺
塔中 行泉坊 円俵山法藏寺
塔中 大乘坊 無量山長遠寺
大久山本妙寺 草竜山代行寺
玉樹山正林寺 本因山妙圓寺
蓮華山本源寺 榮光山妙現寺
妙見山宗円寺 法華経山上行寺
富士山法華寺 妙龍山薬王寺
成就山本國寺
八王子山妙善寺
久日山福泉寺
大鏡山本光寺
道場山妙隆寺
實成山久成寺
寶樹山伊豆園分寺
伊東山蓮正寺
白東山宗川寺
本興山常在寺
寶松山本禅寺
泉光山蓮華寺
辨財山蓮妙寺
須加山本法寺
蓮華山正法寺
興栄山本源寺
法教山本光寺
大導山顕本寺
渡井 久幸
望月 千鶴子
美濃部 園子
藤本 浩
土田 達也
竹川 伸幸
竹川 敦
竹川 昭二
伊藤 光嗣
岩井 易
植松 喜美子
植松 邦仁
植松 清吾
赤池 盛一
赤池 洋人
赤池 鷲藏
赤石 好子
旭 光徳
石川 剛浩
石川 貴久
石川 たきゑ
石川 武
石川 達三
石川 哲也
石川 春江
石川 啓
石川 昌之
石川 れい子
市川 敬正
井出 和夫
井出 和子
井出 教道
伊藤 昭二
伊藤 光嗣
岩井 易
植松 喜美子
植松 邦仁
植松 清吾
植松 政直
植松 良太
海野 晴子
江副 和子
榎本造園
遠藤 勝己
遠藤 英雄
遠藤 秀洋
遠藤 廣幸
太田 泰子
太田川 一郎
小野 英司
小野 順子
重須 婦人会
片寄 健一
勝亦 静男
加藤 玉江
神谷 文宏
川上 英子
川上 恵実
木下 早苗
木本 謙正
木本 達也
久成寺護持会
楠 秀子
久保田 審
国分 裕二
後藤 自動車板金
小林 浩司
齊藤 貞代
齊藤 富太
齋藤 益正
佐々木 知
佐野 洪二
佐野 順一
佐野 昌彦
仕出しほしや
林 廣子
平岡 彦三
深沢 元
福井 聖佳
福井 恵佳
福井 佑佳
藤川 昌子
藤田 大勝
藤田 恵子
藤田 将二
藤田 眞五
藤田 理一
藤田 保険サービス
フジフォト倶
藤巻 孝典
藤巻 隆二
古屋 斐子
古谷 澄子
ホーパールーパー
星谷 悦子
譽田 成子
堀内 正
堀内 文雄
増尾 伊都子
御宿 富靖
三好 久雄
村松 房子
望月 近芳
望月 敏雄
望月 洋子
柳山 恒夫
柳下 悦丹
矢崎 匡俊
矢邊 毅
山田 松夫
養仙坊護持会
若林 章人

御礼 皆様のご献灯心より御礼申し上げます。
お詫び 新規提灯をお申込みされた皆様には諸般の事情により作製が間に合わず、ご心配とご迷惑をお掛けしましたことお詫び申し上げます。
本堂内に新規申込者の御芳名一覽を翌年初御講まで掲載し、提灯奉納の篤志を朝勤にてご報告し各家の隆昌をご祈念しております。
年末年始には尺二寸の提灯にて境内に奉納させていただきます。

教学研究會 開催

十月二十五日(金)、日蓮大聖人第七百五十遠忌・日興上人第七百遠忌慶讃事業の一環として、末寺・興統法縁会・重須会教師向けの教学研究會を開催致しました。

三輪是法先生(立正大学仏教学部教授)に御講義頂きました。

今年度二回目の第六講からは、新たに『法華經の行者日蓮』をテーマに解説頂きました。十三名の教師が受講し、併せてインターネット配信による受講も実施を致しました。



法華寺 落慶式

十一月十日(日)、当山の末寺である法華寺(富士宮市)において本堂・寺務所の落慶式が行われました。当山より貫首猊下が御臨席され本門寺第三十三世並びに法華寺御開山日信上人の遺徳を偲び、この大事業をお慶びになられました。



11月までの三光池および鐘撞き堂周辺の工事状況

三光池の石積みは完成し、水を張る為の最終工事を待つております。鐘撞き堂前の枯山水も完了です。来月号にて終了報告をする見込みです。



新寂回向事務局より

御本堂におきまして、各御霊位の御回向を申し上げます。
西之坊 故 望月 常義様
久成寺 故 土屋 忠義様
久成寺 故 勝又 幹夫様
養仙坊 故 井出 千歳様
久成寺 故 長田 まつよ様
十月末日迄 申込み・申請順
ご冥福をお祈り申し上げます

護山志納金の報告

塔中末寺寺院様におかれましては護山志納金をお納め頂き、厚く御礼申し上げます。左記に、ご寺院名を掲載し、ご報告申し上げます。

- 令和六年度分 十月
- 富士宮市 養仙坊 様
- 富士市 福泉寺 様
- 富士市 妙善寺 様

御会式前 境内清掃奉仕御礼

十一月十二日、養仙坊役員の皆様が仁王門二天門から本堂前までの境内清掃をして下さいました。御礼申し上げます。



本門寺の主な予定

- 令和六年十一月
- 十八日 千葉県弘法寺 団参
- 二十一日 本間俊文先生勉強会
- 二十二日 重須婦人会清掃奉仕
- 令和六年十二月
- 十日 古文書勉強会
- 十三日 役課・婦人会大掃除
- 二十七日 重須婦人会清掃奉仕
- 三十一日 大晦日・新年祝禱会

丹精者御芳名

- 香華・その他 供養
- 御米奉納
- 塔 中 養運坊 様
- 塔 中 養仙坊 様
- 塔 中 蓮行坊 様
- 塔 中 東陽坊 様

おもすの森 賛助金

本法寺内 須加晃仁上人

書籍 北山 平岡 光三様

新潟県史「歴史編」全二十三巻 献花 北山 星谷とみ子 様

諸堂・境内清掃・作業奉仕

本門寺内 重須婦人会 様

塔 中 寺庭婦人 様

本門寺内 石川由緒家 様

北山 望月 正見 様

静岡市 紺文シルク 様

謹んで御礼申し上げます